

8月29日のウクライナ情報

安齋育郎

①ウクライナ紛争の長期化は「軍産複合体の操作」＝中国特別代表（2024年8月27日）

中国政府の李輝ユーラシア事務特別代表は、ブラジル、インドネシア、南アフリカといった国々が、ウクライナ紛争の長期化を「特定の軍産複合体の操作」とみなしていると明かした。

李氏はこうした国々が、西側諸国の兵器がロシアに対して使用されることに懸念を示していると指摘した。

李氏は7月28日～8月7日にかけて、これらの国々を訪問し、ウクライナ紛争の調停に向けた議論を行っていた。



<https://sputniknews.jp/20240827/19013358.html>

②スイス平和エネルギー研究所が暴露した「ウクライナ戦争の裏側」の衝撃 世界は真実の半分しか見ていない（2022年5月31日）

スイスのガンザー博士がウクライナ戦争に関してアメリカが国際法違反をしていることを証明している。日本はこれを完全に無視し事実の半分の側面だけしか見ていない。戦争はこうして起こる。犠牲になるのは日本だ。

◆スイス平和エネルギー研究所のガンザー所長が語るウクライナ戦争:真実の裏側

2022年4月12日、スイス平和エネルギー研究所の所長であるダニエル・ガンザー博士がRubikon.newsに寄稿し、「8年前のオバマ大統領の国際法違反がなければ、プーチンの違法な軍事侵攻はおそらく起こらなかったでしょう」と語った。

動画のタイトルは<ガンザー博士が語るウクライナ紛争：真実の裏側>で、日本語字幕が付いて

いるので、非常にわかりやすい。

なぜ、この動画にたどり着いたかという、実は映画監督オリバー・ストーンのトークを見て、彼がドキュメンタリー『ウクライナ・オン・ファイヤー』を制作していたことを知ったからだ。ところがこの映画は、「あまりに真実を語っている」ことからか、アメリカ政府が妨害して見られないようにしているため、規制がかかってなかなかアクセスできない。さまざまなルートがあり、こちらにもアクセスしたが、うまくいかない。民主主義国家のはずなのに、偏った事実しか知らせず、もう一方のアメリカ政府にとって都合の悪い事実は知られないようにするという、まるで中国大陸のようなやり方だ。

そこで若手のパソコンに強い人をお願いしてやっとたどり着いたのが、このスイス平和エネルギー研究所の動画である。何時間もかけてようやく文字起こししたのだが、よくよく見ると動画の下に文字による解説があった。しかしせっかくなので、自分で文字起こししたものも参考にしながらガンザー所長が何を語っているかを、概略をご紹介したい。

◆ウクライナ戦争の出発点

2022年2月24日、ロシアのプーチン大統領は軍隊にウクライナへの侵攻を命じたが、これは国連の暴力禁止規定に違反するため違法だ。一方、そのほぼ8年前の2014年2月20日、アメリカのバラク・オバマ大統領は、ウクライナをNATOに引き込むためにウクライナ政府を転覆させた。このクーデターがウクライナ戦争の出発点だ。

プーチンの侵略と同じように、オバマの行動は国連の暴力禁止に違反し、したがって違法だ。現在、メディアではプーチンの侵攻について多く報道され、正しく批判されている。しかし、オバマのクーデターについては、ほとんど報じられていない。なぜ、物語の半分しか語られないのか？

ガンザー所長の著作『違法な戦争 (ILLEGAL KRIEGE)』でもウクライナのクーデターについて述べている。「欧米が主導したクーデターであることは間違いない」と、元CIA職員のレイ・マクガバンは認めている。

ベルリンの壁が崩壊し、ソビエト連邦が崩壊した後、ウクライナは1991年にソビエト連邦からの独立を宣言した。ロシア政府の弱体化は、米国の影響力を東欧に拡大し、かつてモスクワが支配していたワルシャワ条約加盟国をNATOに加盟させる最初のチャンスを米政府に与えた。

◆NATOの東方拡大

米国はロシアにNATO不拡大を約束していたにもかかわらず、NATOは拡大され続けた。ロシアは激怒し、米国でも注意喚起の声が上がった。「もし中国が強力な軍事同盟を結び、カナダやメキシコを参加させようとしたら、そのときのワシントンの怒りを想像してみたらよい」と、シカゴ大学の政治学者ジョン・ミアシャイマー氏が警告した。ミアシャイマー氏によれば、欧米が不必要にロシアを刺激したため、ウクライナ危機を引き起こしたとのこと。

◆マイダンでのジョン・マケイン上院議員

2013年末、ウクライナの首都キエフの中央広場「マイダン」では、ヴィクトル・ヤヌコヴィッチ大統領とニコライ・アザロフ首相の政権に反対するデモが行われていた。元ボクシング世界チャンピオンとして有名なビタリ・クリチコがデモを主導し、米国と緊密に打ち合わせた上で扇動的な演説をした。この緊迫した状況の中、米国の有力上院議員ジョン・マケインがウクライナに飛び、2013年12月15日、クリチコとともにマイダンの抗議者陣営を訪問した。米国の上院議員がデモ隊に

ウクライナ政府転覆を促した。

もし、ロシアの有名な国会議員がカナダに飛び、首都オタワでカナダ政府を転覆させようとするデモ隊を支援したら、米政府はどれほど怒り狂うだろうか？

米国はまさにそのようなことをウクライナで行ったのだ。

◆駐キエフ米大使館が抗議行動をコーディネート

マイダンのデモのリーダーたちは、米大使館に出入りし、そこで指令を受けていた。一部のデモ隊は武装しており、警察に対して暴力を行使した。キエフの米大使館では、ジェフリー・パイアット米大使がデモ隊を支援し、ウクライナの不安定化を進めた。パイアット大使は、元ボクサーのクリチコと直接コンタクトをとっていた。マイダン広場の組織化されたデモはどんどん大きくなり、キエフの緊張は高まっていった。現在のバイデン米大統領もマイダンのデモを支持し、クーデターに直接関与していた。2013年12月、当時オバマ政権下で副大統領だったバイデンは、夜中にヤヌコビッチ大統領に電話をかけ、「警察がマイダンの群集を排除したら、ただでは済まないぞ」と脅した。その後、ヤヌコビッチは予定していた排除行動を撤回した。

◆ビクトリア・ヌーランドの50億ドル

米務省でクーデターを担当していたのは、ビクトリア・ヌーランドだ。ヌーランドはブカレスト首脳会議で合意されていたように、ウクライナをNATOに加盟させるため、アザロフ首相とヤヌコビッチ大統領を引きずり降ろそうとしていた。マイダンのデモの指導者たちは、米大使館から指令を受けただけでなく、報酬も受けていた。2013年12月、ヌーランドは講演で「我々はウクライナの民主主義を保証するために50億ドル以上を投資してきた」と語った。これには、元米下院議員のロン・ポール氏など、米国でも批判が出た。ウクライナのデモ隊の中にお金をもらっている人がいることは、当時公然の秘密だった。米国の大富豪ジョージ・ソロスのように、革命に資金を提供する人たちがいた。(会話録音に関しては省略した。)

◆2014年2月20日、狙撃手が状況をエスカレートさせる

2月末、マイダンの状況がエスカレートした。2014年2月20日、正体不明の狙撃手が複数の建物から警察官やデモ隊に発砲し、40人以上の死者を出すという大虐殺が発生し、状況は混乱した。ただちに当時のヤヌコビッチ政権とその警察組織は虐殺の責任を負わされたが、彼らには事態をエスカレートさせることに何の得もない。彼らとしては政権の転覆を避けたかったからだ。

しかし政権打倒を目指していたボクサーのビタリ・クリチコはドイツのタブロイド紙『ビルト』に「国際社会は独裁者が国民を虐殺するのを傍観してはならない!」とコメントし、政権転覆は成功した。ヤヌコビッチ大統領は失脚し、ロシアに亡命した。その後、億万長者のペトロ・ポロシェンコが大統領に就任し、ウクライナをNATOに導くと即座に宣言。

◆プーチンがクーデターについて語る

ロシア人は米国がクーデターを組織したことを知っており、激しい怒りを覚えていた。もし米国と欧州が違憲行為を行った者達に対して、「そんなやり方で政権を取っても決して支持しない」、「選挙をやって勝てばいいんだ」と告げていたら、状況はまったく違っていただろうとプーチン大統領は語った。

◆クリミアの分離独立

プーチン大統領は、手をこまねいたままウクライナを手放すつもりはなかった。ヤヌコビッチ政

権崩壊直後、2014年2月23日未明にクリミアの「奪還」開始を指示した。2014年2月27日、クリミア半島最大の都市シンフェロポリで、記章のない緑の制服を着たロシア兵がすべての戦略地点を占拠し2014年3月16日、クリミアの人口の97%がウクライナから離脱し、ロシアに加盟することに票を投じた。それ以来、クリミア半島はウクライナではなく、ロシアに属している。

ウクライナ戦争では、米国もロシアも国際法を遵守していない。

まずオバマが2014年2月20日のクーデターで国際法を破った。

これに対し、プーチンは2014年2月23日にクリミアを占領して国際法を破った。

ロシアのクリミア占領は「現行の国際法に対する侵犯」であり、「ウクライナの主権と領土保全が侵害された」と、元連邦行政裁判所判事のディーター・デゼーロートは説明している。西側諸国は現在プーチンを厳しく批判しているが、西側諸国も数々のケースで現行の国際法に繰り返し違反している。プーチンを批判する資格に疑問符が付される。

◆ドンバスの分裂

キエフのクーデターとクリミアの分離独立後、ウクライナは内戦状態に陥った。新首相のヤツェニウク氏は、軍、諜報機関、警察の力で国全体を支配下に置こうとした。しかし、兵士、警察、シークレットサービス関係者は必ずしも全員がクーデター政府の指示に従ったわけではない。ロシアと国境を接するウクライナ東部のロシア語圏では、ドネツク地区とルガンスク地区がキエフのクーデター政権を承認しないことを宣言した。「分離主義者たちは警察署や行政庁舎を占拠し、新政府は不法に誕生したものであり正統性がない」と主張した。

ヤツェニウク首相はこれに激しく反発し、分離主義者はすべてテロリストであると断じた。CIA長官ジョン・ブレナンはクーデター実行者に助言するためにキエフに飛んだ。2014年4月15日、ウクライナ軍は米国の支援を得て「対テロ特別作戦」を開始し、ドネツク地区のスラビャンスク市を戦車や装甲兵員輸送車などで攻撃した。

これがウクライナ内戦の始まりで、8年間で1万3千人以上の命が失われ、それが2022年2月24日のプーチンによる不法侵攻につながったのだ。

キエフでのクーデターは、プーチンのウクライナ侵攻を正当化するものではなく、それが国際法の侵犯であることに変わりはない。しかし、私たち西側諸国が2014年のクーデターを無視するならば、ウクライナ戦争を理解することはできないだろう。

(ここまでがガンザー所長の分析の紹介。キエフなどは原文のママ)

◆基本軸で合致していた筆者の見解

このような動画を初めて見て驚き、激しい衝撃を受けた。

なぜなら、筆者の書いてきたものはガンザー所長の動画での分析の足元にも及ばないが、しかしこれまで書いてきたコラム(5月1日の<2014年、ウクライナにアメリカの傀儡政権を樹立させたバイデンと「クッキーを配るヌーランド」>や5月6日のコラム<遂につかんだ「バイデンの動かぬ証拠」——2014年ウクライナ親露政権打倒の首謀者>と一部重なっており、拙著『ウクライナ戦争における中国の対ロシア戦略』で描いた軸とも一致していたからだ。

私ごときものが主張しても、日本政府は「聞く耳を持たない」かもしれないが、しかしスイス平和エネルギー研究所所長の主張やオリバー・ストーンが描いた映画であるなら、信用してくれるのではないだろうか。

真実はどこから斬り込んでも同じところに点を結ぶ。

日本はこの真実から目を逸らし、戦争に向かってまっしぐらに進もうとしていることに気が付いているだろうか？

今般のアメリカの対応を見れば、日本は自国の軍事力を強化する以外にないのは明らかだ。しかし、日本がどの文脈の中で戦争に巻き込まれようとしているのか、その真相を日本国民は自分自身のために直視しなければならないと思う。



<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/ca7c8e141d80b9bf7dbc01b418e25809c021cc00?s=0>

9

③クルスクのアメリカ兵 Z(2024 年 8 月 23 日)

クルスク地域でロシアに侵攻したアメリカ兵が、他の多くの NATO グループやウクライナ兵とともにアメリカ国旗を持ってポーズをとり写真を投稿している
そして死亡したイギリス人、ポーランド人などの写真がすでに多数出回っている

5



<https://x.com/miya397156651/status/1826726071011869066?s=09>

④8月27日の戦況（2024年8月27日）

クルスク州方面でウクライナ軍が過去24時間に失った人員数は最多で400人に、装甲車両は30台に及んだ。ロシア国防省が発表した。

27日にかけての深夜、ウクライナの最重要軍事空港インフラに対し、ロシア軍は極超音速空対地ミサイル「Kh-47M2 キンジャール」をはじめとする精密兵器および攻撃ドローンによる集団攻撃を行った。



<https://sputniknews.jp/20240828/-827-19014628.html>

⑤長距離ミサイルでの露領攻撃案は「火遊び」＝ラブロフ外相（2024年8月27日）

ウクライナが長距離ミサイル「ストームシャドウ」で露領を攻撃するため、西側諸国に使用許可を求めているとの報道について、ロシアのセルゲイ・ラブロフ外相がコメントした。

「こうした憶測は長い間あった。ウクライナは小さな子どもがマッチで火遊びをするようだ。これは核を持つ西側の大人たちにとっては非常に危ない」

「ロシアにも核ドクトリンがあるが、それをよく理解することが重要だ。今それはより明らかになってきており、米国指導層もよく知っているはずだ」

これまでに英メディアは、ウクライナがモスクワへの潜在的脅威をつくるため、露領奥深くにデモンストレーション用の長距離ミサイル攻撃を行う許可を西側諸国に求めたと報じていた。使用には米国の許可も必要だが、これまでには認めていない。



<https://sputniknews.jp/20240828/-827-19014628.html>

⑥IAEA 事務局著 クルスク原発に原子力事故のリスク発生と明言（2024年8月27日）

国際原子力機関（IAEA）のラファエル・グロッシ事務局長は露クルスク原子力発電所を訪れ、主要な施設を視察した。グロッシ氏は、原発付近で行われた戦闘行為の痕跡を見せられたと明かしている。

グロッシ氏は、クルスク原発を標的にしたドローン攻撃の痕をこの目で確認したと語っている。

「クルスク原発に外から作用が加えられた場合、その影響は極めて深刻になりうる」
グロッシ氏はクルスク州に「原子力事故のリスクが生じた」と明言した。

「クルスク原発の原子炉には防御用の格納容器がない。このため、脆弱だ」

グロッシ氏はロシア外務省、露国営原子力企業「ロスアトム」とともに原子力事故を防止する方策を話し合っているとつけたした。

グロッシ氏はまた、非常事態の中で自分をクルスク原発に招待したプーチン大統領に謝意を伝えるよう要請した。8月22日、プーチン大統領は、前日、ウクライナ軍によるクルスク原発の攻撃の試みがあり、これについてIAEAに通知したと発表していた。



<https://sputniknews.jp/20240827/iaea-19014146.html>

⑦ しっかり考えろ！日本の国会議員とメディア ロシアのウクライナ侵攻の真実 | 鈴木宗男 (2024年8月24日)

<https://youtu.be/Hq5oyhrShVk>



<https://www.youtube.com/watch?v=Hq5oyhrShVk>

⑧ ロシア領侵攻で高まる世界戦争への発展可能性 (東洋経済、2024年8月27日)

ウクライナ戦争が始まって、ちょうど2年と半年である。戦争としてこの2年半が遅いのか早いのか、いろいろと議論はあろう。総力戦ではない条件付き戦争という近代戦においては、つねに全力投球ではなく、有利な条件をもって交渉にあたり、停戦を考えるのがつねである。

だから、交渉という問題を考えるとこの時間の長さは当初より考えられていたこ

とではある。しかし、戦争の被害の大きさを考えるとき、2年半はとても長いといえる。

■ウクライナの新たな選択

8月24日は、ウクライナの独立記念日だった。この日を祝うべき日であるが、ロシア軍の総攻撃の噂もあった。各国大使館にはウクライナから避難命令が出ているという話も出たほどだ。

なぜそうした事態が起きたのかは、2週間前のウクライナ軍によるロシア領クルスクへの総攻撃に原因がある。

2月にドネツク近郊の要塞アウディーイウカ(アフディフカ)が陥落して以後、ロシアの東部戦線における進撃は止まることがない。だから、防戦一方のウクライナが、いわばそのロシアに奇襲攻撃をかけたということである。

これは陽動作戦なのか目くらまし作戦かはわからないが、ロシア国境を越えて侵入したという点で、ウクライナは新たな選択をしたといえる。しかし、正直に言えば、宣伝効果的側面は評価されるものの、実質的意味は悲劇的なものといえるかもしれない。

実際、西欧諸国のメディアは一斉にこの侵攻を大勝利と報道し、あるメディアはロシアの弱点を見つけたウクライナは、ロシアを敗北させるのではとさえ報じた。

もちろん、ウクライナ軍のロシアへの侵入は今回が初めてというわけではない。1年前にベルゴロド方面に侵攻してロシア軍に撃退されている。

今回はその兵の数(1万人を越す兵隊が投入されたともいう)において、その武器の量において格段に違う。さらには、このクルスクという場所は、ある意味、因縁の場所でもある。これらを考えると、まったく違っているともいえる。

因縁とは何か。この侵攻が第2次世界大戦当時のドイツ軍によるクルスク奇襲作戦を思い出させるからである。

■ドイツ軍によるクルスク大戦車戦

今から81年前の1943年7月5日、ドイツ軍は最後の決死作戦に出る。これがクルスクの戦いといわれるもので、第2次世界大戦では最大の攻防線である。

結局ドイツ軍はこの戦争で敗退し、その2年後にドイツ第三帝国は壊滅する。当時の司令官はソ連側がジューコフ、ドイツ側はマンシュタインであった。

この戦いは独ソ戦において決定的攻防線であり、この勝敗が、少し前の「スターリングラードの攻防戦」(1942年7月から1943年2月)とともに、ドイツのソ連への侵攻、すなわち1941年6月から始まったバルバロッサ作戦の転機となった。

2度あることは3度あるというが、2024年8月にウクライナ軍が突然にクルスク

攻撃作戦を開始した。最初はナポレオンのベレジナでの戦い(1812年11月)だ。ともに激しい戦いの後、ロシアの勝利に終わっている。

クルスクはとりわけ戦車戦として有名で、上映時間8時間というソ連映画の大作『ヨーロッパの解放』の第1部が「クルスク攻防線」であった(青木基行『クルスク大戦車戦』学研M文庫、2001年参照)。

クルスクという町は昔から交通の要衝で、川の合流点でもある。1000年の歴史を持つ町でもある。また、ロシアの工業地帯であると同時に、チェルノブイリと同じ種類の原子力発電所があることでも有名で、しかも北極海のガス油田から来るガス・パイプラインの分岐点でもある。

それは、ウクライナを通過してポーランドとドイツに流れるキーステーションである。そしてウクライナ戦争後もこのガス・パイプラインは西欧にガスを供給していたのだ。

原子力発電所はクルスク以外にも、ロシアとウクライナ国境沿いにはいくつか存在する。ロストフ、ノヴォヴォロネシユスカヤ、スモレンスク、クリムスカヤ、ザポロージャなどだが、いずれもロシアが支配している地域にある。

原子力発電所はウクライナ独立以後もロシアが管理していた。それは、原子力発電がロシアに依存していたことを意味している。

■なぜクルスクに軍を向けたのか

しかし、この2年半にわたる戦争で、ウクライナはドンバスの領土を失い、戦争の行く末がすでに見え始めたと思われる今、なぜクルスク攻撃を始めたのだろうか。

2024年8月になって、世界戦争の不安はガザで高まっていた。それはガザでの戦争が、イスラエルとイランとの戦争に発展するのではないかという懸念があったためだ。そうなると大規模な中東戦争、ひょっとするとNATO(北大西洋条約機構)との戦争に発展する可能性があるからだ。

そんな矢先、このウクライナ軍のロシアへの越境攻撃が始まったのだ。心配なのは、これにアメリカを含むNATO軍が参加しているのではないかという、疑念である。

これまでの戦争は、突発的侵攻は別として、戦争はウクライナ領土内で行われていた。そして戦争当事者も2つの国に限られ、だからこそウクライナ戦争はロシアの侵略戦争ともいわれていた。

しかし、ロシア侵攻ともなればロシアへの侵略戦争、そしてその背後にNATOがいたとなれば、ロシア対NATOの戦争という事態となり、ウクライナ戦争ではなくなる。誰もが懸念したのは当然であった。

しかしながら、アメリカですらウクライナの侵攻について十分説明されていなかった可能性も出てきている。この侵攻の目的について知らなかったというのである。

確かに侵攻の目的によっては、この戦争は世界大戦へ飛び火する。プーチンはこの侵攻は NATO が仕掛けたものだと言ったが、それは定かではない。では何の目的で計画されたのであろう。

ドイツのクルスク攻撃は、ソ連の突出部であるクルスクを攻撃し敗北させることで、戦争の大逆転を狙ったものだと言われるが、今回の目的は何であったのか。独立記念日のための花火としては、あまりにも危険すぎる冒険である。

■クルスク攻撃という危険な作戦

そこで考えられるのは、一種の陽動作戦だったということだ。ドンバス地域での不利な状況を打開するため、ロシア軍の手薄なクルスクを攻撃することで、東部のロシア軍をそちらに移動させるという考えである。しかし、ロシア軍の総合力からいって、移動させる必要もないことは明らかである。

とすると、停戦に向けて有利に進めるための交渉作戦か。クルスク地域はガス・パイプラインと原子力発電所という、ロシアにとっても世界にとっても重要な施設がある。この地域に威圧をかけることで、停戦合意を有利に進めることなのか。これはとても危険な作戦といえる。

すでにロシア占領下にあるザポロージャの原子力発電所に、ウクライナ軍は何度も攻撃している。しかし原子力施設の破壊は、世界を大混乱に陥れる可能性がある。

その意味で、原子力発電所は戦争の外になければならない施設といえる。ガス・パイプラインもそうだ。これによって不利益を被るのはウクライナ、そして西欧諸国であるからだ。

もちろん危険にある施設を使って、戦争の危険性を訴えるプロパガンダにはなる。ウクライナは何度かそれを試みてはいる。

NATO がこの作戦に対して危惧をもったのは、まさにこの問題であろう。原子力発電所などの攻撃は、世界に悲劇的な衝撃をもたらすからである。それはロシアとて同じであろう。考えたくはないが、もしそうなれば核戦争の可能性が近づくからだ。

おそらく、考えられることは、ウクライナ側の攻撃の出発都市スームィへの攻撃を避けるために先手を打った作戦であったということかもしれない。これならば、世界戦争に発展する可能性はないだろう。

スームィは、キーウ(キエフ)に近い地域である。比較的正しいロシア側情報を知

らせてくれるイギリスのユーチューバー、アレクサンダー・メルクーリス (Alexander Mercouris) が 8 月 23 日に報道したところによれば、その作戦の意味は、2022 年 2 月にロシアが行ったスームィ攻撃にずいぶんな恐怖を抱いたからだ、というものである。

ウクライナ戦争が始まった当初、ロシアはウクライナ全土、とりわけキーウ近くに侵攻を進めた。これによって、首都陥落の可能性を憂慮したゼレンスキー政府は、首都をリヴィウ(ルヴォフ)に移転させようとまで考えたようだ。スームィからキーウまでは直線で 300 キロメートルしかない。

2022 年 3 月にスームィは陥落し、一時ロシアに占領されていた地域である。ロシアは開戦当初全面攻撃に出ていたが、これは陽動作戦だった。ウクライナ軍を分散させ、ドンバス防衛を弱体化する作戦であったともいわれている。

もし本格的にこの地域を占領されると、首都防衛は困難となる。だから、逆に防衛的攻撃に出たのだというのである。

一方で、クルスク攻撃は成功したのかどうかという問題が残る。東部戦線では兵力が不足している状況で、この地域に大きな兵力を回せるのかどうか

また、一気に 1000 平方キロメートルの広大なロシア地域を占領したものの、それを維持する能力があるのかどうか。そのために武器などの支援物資を運ぶ兵站は維持されているのかどうかといった問題などが、残る。

かつて日本軍がやったように、ひたすら兵士の死を無駄にする万歳作戦のような結果にならないのか。一時的な勝利によって、全体の戦略が見失われるのではないか。

■一時的な勝利に酔ってはならない

いずれにしろ問題は、この戦争の落ち着きどころである。戦争を拡大すること自体が目的で、原子力やガス・パイプラインが交渉の隠し球だとすると、世界にとってそれは恐怖だ。

たとえそうでなくとも戦争を拡大することは、世界戦争を惹起し、ロシア側の攻撃の激化を進めるだけである。

私はこの戦争が勃発した頃から、これは中口対西欧という構造になるべき問題ではなく、スラブ人の問題であると述べてきた。それは今でも変わらない。

世界の両極が対立する中で、一触即発の危険は増している。それだからこそ、この戦争を世界戦争への引き金にしてはならないのだ。

的場 昭弘 : 神奈川大学 名誉教授

<https://news.yahoo.co.jp/articles/88d6c0e1b0141d44c398be14a8f3050f5e395b7c?page=5>

⑨ロシア・クルスク原発「深刻な原子力事故が起きる恐れ」IAEA 事務局長が警鐘 (2024年8月26日)

IAEA（国際原子力機関）のグロッシ事務局長はロシア西部のクルスク原発で深刻な原子力事故が起きる恐れがあると警鐘を鳴らしました。

グロッシ事務局長は27日、ウクライナ軍が越境攻撃を続けるロシア西部クルスク州のクルチャトフにあるクルスク原発を視察しました。

視察後、グロッシ事務局長は記者団に「クルスク原発はほぼ通常通り稼働している」「ただ、ドローン攻撃を受けた形跡があった」と明らかにしました。

そして、「いかなる状況においても原発は攻撃すべきでない」と強調し、「さらなる外部からの衝撃などは、深刻な原子力事故につながる恐れがある」と警鐘を鳴らしました。

特にクルスク原発は圧力容器や格納容器がない旧型の原発で核燃料が置かれている原子炉が普通の屋根でしか守られておらず、非常に脆弱（ぜいじゃく）だとしています。

ロシアはウクライナによる越境攻撃が始まって以降、原発が度々攻撃されていると主張しています。

グロッシ事務局長はウクライナも訪問し、ゼレンスキー大統領と会談する予定です。



<https://news.yahoo.co.jp/articles/85456b978b8ac06dc129f6a86a6f98a779d874da/images/0>

00

⑩中国人民解放軍（PLA）兵士がロシアに到着（2024年8月26日）

NATO/ウクライナとの戦いに臨む、到着したとされる18,000人の兵士。

<https://x.com/i/status/1827945446859575433>



<https://x.com/Reloaded7701/status/1827945446859575433?s=09>